研究結果報告

報告日 平成２６年４月１５日

グループ名	清二研究会	**フリガナ** **代表者氏名**	マエザワ　クラト 前沢　蔵人
学校名 **（代表者）**	江戸川区立清新第二小学校	**電話番号**	０３－３８７８－１２６１
研究テーマ	「通常の学級と特別支援学級の児童の交流が果たす役割」		
研究期間	**平成１９年　４月　１日　から　平成２６年　３月３１日　まで**		

主題設定の理由

本校は平成１９年度より特別支援学級を併設している。

開設以来，通常の学級の児童と特別支援学級の児童の交流及び共同活動は急務の課題であった。

そこで，年度を追って児童間及び指導者間でさまざまな交流の機会を増やし，よりよい教育活動を行えるよう研究を重ねてきた。

研究の概要

１児童間の交流と支援の方法

①授業交流

通常の学級の授業に特別支援学級の児童が参加することにより，お互いに良い影響を与え合うことを実証した。参加するのは毎回全員ではなく児童の実態を考慮して行った。今年度は、昨年度の交流の成果をもとに、各教科の授業場面など以下のような場面で交流を行った。その中のいくつかについて後述する。

学年	教科など	対象	時期	内容など
１年				
２年	特別支援学級に在籍者なし			
３年	算数	１名	通年	少人数にも分かれる。
	総合的な学習の時間	全員	適時	地域の高齢者との交流
４年	総合、国語、算数、理科、社会、給食など	１名	２学期～	対象児が一緒にできそうなことについてできるだけ行った。
５年	算数 音楽	１名	通年 運動会後	算数は、少人数にも分かれる
	体育	１名	２学期～ 適時	対象児が一緒にできそうなとき
	総合的な学習の時間	全員	通年	ブラスバンド活動
６年	算数	２名	２学期後半～	単元によらず、継続的に行った。
	音楽	１名	運動会後	昨年より継続。
	総合的な学習の時間	全員	１，２学期	ブラスバンド活動
	給食	全員	適時	行事の前や卒業前など

（１）音楽科

対象児	通常の学級：第６学年（２２名） 特別支援学級：第６学年（１名）
期間	６月の運動会後～３月
交流と支援の方法	・器楽、声楽両方とも、通常の学級の児童と混じって交流を行った。
成果と課題 ○成果 ●課題	○コミュニケーションが特別支援学級の児童にとって課題であり、初めは音楽室に入ることを躊躇していたが、授業に参加していくことで、毎回楽しそうに参加できるようになった。通常級の児童も自然な形で受け止めるようになった。

対象児	通常の学級：第５学年（１７名） 特別支援学級：第５学年（１名）
期間	６月の運動会後～３月
交流と支援の方法	・器楽、声楽両方とも、通常の学級の児童と混じって交流を行った。 ・児童がどのように活動をすればよいのか分からず困っている時に、個別に声かけをして支援を行った。
成果と課題 ○成果 ●課題	○技能面では、通常の学級の児童よりも勝っている部分があり、通常学級の児童にとって良い刺激となった。 ●グループ活動など関わる場面があったが、他の児童とほとんど話をせず、活動をしている場面が多かった。

（２）算数科

対象児	通常の学級：第６学年（２２名） 特別支援学級：第６学年（２名）
期間	２学期後半～３月
交流と支援の方	・解決場面において、分からない部分を説明したり、図を描いて説明したりするなど個別の支援を行った。 ・答えられそうな場面では指名して発言を促した。
成果と課題 ○成果 ●課題	○特別支援学級の児童にとっては自分と同学年の児童の学習内容を知ることで、自己の達成度を客観的に見られるようになった。また、特別支援学級での授業と通常の学級での授業の違いに気付き、授業における「振るまい方」を学習することもできた。通常の学級の児童にとってもよい刺激となった。 ○特別支援学級の児童は、計算などのスキルについてはある程度獲得し、授業に参加することができる。 ●特別支援学級の児童は、考え方や抽象的な概念の学習では特に困難を示した。授業の進度を考えると、十分に時間をかけた支援が難しいときがあった。

（３）体育科

対象児	通常の学級：第５学年（１７名） 特別支援学級：第５学年（１名）
期間	２学期～３月。同学年の体育科の授業を週１回程度参加した。
交流と支援の方法	・器械運動やボール運動、陸上運動、体つくり運動などの学習に参加した。 ・分からない動きがあったら、教師が個別に対応したり、子ども同士で教え合わせたりして、全体と同じような流れで動けるように支援した。

	・教え合いの場面や作戦を考えさせる場面を設定し、一人一人の動きの良さを認めさせたり、さらなる技能の向上のために学び合ったりさせるようにした。
成果と課題 ○成果 ●課題	○お互いに助け合ったり、同じチームとしての仲間意識を高めたりすることができた。 ○分からないことをそのままにせず、周りを見て同じことをしようとしたり、教師や友達に聞いて動こうとしたりして、自ら周りと関わろうとすることができた。 ●通常の学級の児童と特別支援学級の児童との技能の差があり、ボール運動では、その差が顕著に出てしまった。

（４）総合的な学習の時間

本校では総合的な学習の時間に第５，６学年全員参加のブラスバンド活動を行っている。児童は，自らの課題を活動の中で発見し，それを解決するために担当楽器ごとに相談したり，練習したりしている。そしてそれらの活動を毎回ポートフォリオをにまとめ、それを振り返らせることで自分の成長を実感すると共に自分の生き方を考える機会としている。

対象児	通常の学級：第４学年（１１名）、第５学年（１７名）、第６学年（２２名） 特別支援学級：第４学年（２名）、第５学年（５名），第６学年（８名）
時期	第４学年：１２月～３月、第５学年：通年、第６学年：４月～１２月
交流と支援の方法	・児童の実態に合わせて，マーチングキーボード、トランペット、ベルリラを担当楽器とした。マーチングキーボードは特別支援学級の児童のみで担当し、総合的な学習の時間以外でも特別支援学級の授業の中で練習を行った。トランペットとベルリラを担当する児童は総合的な学習の時間において，通常の学級の児童と共に課題解決型の練習形態をとった。 ・学習の成果を発表する場として，毎週の朝会での演奏，地域の祭りでのパレード，運動会を設定した。
成果と課題 ○成果 ●課題	○技能面では、問題なく参加することができ、特に第４学年の児童は、ブラスバンド活動を楽しみにしており、休むことなく毎回練習に参加することができた。 ○通常の学級の児童とっては、できていないところを優しく教えてあげたり、特別支援学級の児童のよさを認めてあげたりして、お互いの理解を深めることができた。

（５）給食の時間

対象児	通常の学級：第６学年（２２名） 特別支援学級：第６学年（８名）
期間	９月、３月
交流と支援の方法	・９月の行事の前、３月の卒業前など行事などに向けてお互いを知る機会として設定した。 ・ランチルームにて行事などの班ごとに一緒に給食を食べた。 ・特別支援学級の児童は自分の学級での給食の配膳を担当しているため、通常の学級の児童が特別支援学級の児童の給食を配ったり、準備したりすることもあった。
成果と課題 ○成果 ●課題	○授業とは違い、自由な場面で児童間の交流が見られた。教師が意図していなかった場面や児童同士の交流も生まれた。 ●特別支援学級の児童によっては、何を話せばよいのか分からずに緊張し、通常の学級の児童と話せない児童も見られた。

（６）第４学年における交流

対象児	通常の学級：第４学年（１１名） 特別支援学級：第４学年（１名）
期間	２学期～３月
交流と支援の方法	・通常の学級の授業の中で特別支援学級の児童にとって学習が成立しそうな内容を選んで、教科を問わずに交流を行うようにした。その結果、国語、算数、理科、社会、総合、清掃、給食の時間など、交流は多岐にわたった。
成果と課題 ○成果 ●課題	○通常学級の児童と特別支援学級の児童が登校時にも一緒に会話を楽しんだり、休み時間にも互いにかかわったりする場面が見られるようになった。 ○教科を限定せずに交流したことで、特別支援学級の児童に合った内容を選ぶことができた。逆に、あまり合っていない教科や内容を知ることもできた。

②宿泊的行事

次の２つの宿泊的行事において，交流を図った。

（１）林間学校（２泊３日）

第５学年は通常の学級の児童が１７名、特別支援学級の児童が５名合同で，夏季休業中の宿泊学習を行った。２泊３日の宿泊学習で、できるだけ多くの交流ができるよう、事前に検討を重ねて臨んだ。

対象児	通常の学級：第５学年（１７名） 特別支援学級：第５学年（５名）
時期	夏休み期間中
交流と支援の方法	・昼間の活動や食事、部屋別、活動班など、全ての活動や班編制で、通常の学級の児童と特別支援学級の児童が混在するようにグループ分けを行った。特に配慮が必要な児童がいるグループに対しては、特別支援学級の担任が入って、補助をした。 ・２日目のハイキングは、比較的歩きやすいコースを選んだ。体力に不安がある児童はバスに乗って歩行距離を短くするなどの支援を行った。
成果と課題 ○成果 ●課題	○通常の学級の児童と特別支援学級の児童とが長時間一緒に関わることで、相手を思いやり、助け合いながら、行動することができた。 ○特別支援学級の児童の良い部分を通常学級の児童が認め、それにならって一緒にやろうとすることができた。 ○事前に検討を重ねたため、特別支援学級の児童にとっても無理のない行程で進めることができた。 ●今回は参加児童が２２名に対して管理職を含めたスタッフが７名（うち３名は特別支援学級担任）同行した。夏季休業中の行事のため多くのスタッフが同行することができたが，人的な配置が不可欠であることも改めて分かった。

（２）セカンドスクール（６泊７日中の２泊３日）

本校では，６泊７日の宿泊学習を第６学年で行っている。毎年，新潟県の魚沼市に宿泊し，普段できない活動や共同学習を行ったり，地元の祭りに参加して交流を深めたりする場としている。例年，２学期が始まった９月に実施している。

対象児	通常の学級：第６学年（２２名） 特別支援学級：第６学年（８名）
時期	９月１４日～１６日
交流と支援の方法	・通常の学級児童は６泊７日で行っているが，特別支援学級の児童はその中　の２泊３日に参加した。昼間の活動は通常の学級の児童のグループに

	加わり，部屋も同室で過ごした。その間は特別支援学級の担任も同行した。
成果と課題 ○成果 ●課題	○寝食を共にすることで、お互いの理解が深まった。通常の学級児童は、声かけや必要な手助けを上手にしてあげられるようになった。 ○特別支援学級児童は、係の仕事、行動などを見て学び、意欲的に活動できるようになってきた。

③その他の交流

上記以外でも，昨年同様、次のような場面において交流を行った。

・たてわり班活動では，全グループに全学年の児童及び特別支援学級の児童が混在するように班編制をし，すべての活動を一緒に行うようにした。支援の必要な児童には，介助員がついて補助をした。
・朝会以外にも，特別支援学級の児童は全学校行事に通常の学級の児童と同じように参加した。　児童の祭り「二小まつり」では，特別支援学級でも店を出し，全児童が来店できるようにした。
・運動会では、特別支援学級のみの種目は設けなかった。その代わり、特別支援学級の児童は各学年の演技、競技に参加した。通常の学級の児童は、同学年の友達に対してやさしく言葉かけをしたり、さりげなく助けたりという姿が多く見られた。
・３０周年記念式典では特別支援学級の児童は各学年に入ってアトラクションを行った。

２指導者間の交流

①同じ主題での校内研究

研究主題を同じに設定し，特別支援学級の授業を全員が参観，協議することで，学習の苦手な児童への指導法や，個々の児童の特性を考慮した指導の仕方を考えた。

平成 25 年度は、「筋道を立てて考え、表現する子の育成～算数的活動を通して～」として、共通のテーマで通常の学級４クラス，特別支援学級３クラスで授業研究を行い，児童の指導について方法や考え方を共有した。

②通常の授業の相互参観

通常時の授業をそれぞれの担任が参観し合うことで，児童理解を深めるとともに通常の学級の担任は指導法を，特別支援学級の担任は担当学級の児童と同年齢の児童の発達を知る機会とした。

研究の成果と今後の課題

1児童の立場から

①対人コミュニケーションスキルの学習ができる

○特別支援学級の児童にとって

特別支援学級内では担任の特別の配慮によって児童は安心して生活できている。しかし、それが長期間続くと、コミュニケーションのしかたが固定的になってしまったり、特殊化されてしまったりする場合がある。通常の学級の児童との交流を重ねることで、特別支援学級の児童も相手に合わせるという意識が生まれ、新しいコミュニケーションの形を学習することができると考えられる。また、通常学級の児童が同じ場にいるということは、より一般的な形でのコミュニケーションのモデルを見てそれを模倣する（モデリング）や、特別支援学級内でトレーニングした対人コミュニケーションスキルの実践も期待できる。

実際の交流でも、特に高学年では通常の学級の児童に対して接し方を事前に考えたり、通常学級児童同士のやりとりを目の当たりにしたりして「もっとうまく話せるようになりたい」「どうやってかかわればよいのだろう」と、コミュニケーションに対する意識の高

まりが見られた。

○通常の学級の児童にとって

学童期前半の子供たちは、相手が違う感情や考えをもつことを理解はできるが相手の立場に立って考えるのが難しい。また、学童期後半にあっても自己の状況によっては相手の考えや気持ちを理解して行動するのが難しい場合がある。それらの段階を乗り越えて、児童は相手の観点を理解し、自分の観点と統合して物事を考えられるようになっていく。

特別支援学級の児童とのかかわりは、自分の意志を伝えるためにも常に相手の立場に立つことが要求される。同学年の児童が相手だとどうしても自分の気持ちを押し通してしまう児童も、特別支援学級の児童に対しては自分の立場よりも相手の考えや気持ちを想像して行動したりかかわったりしていた。このかかわりを通して、通常学級の児童の対人行動の質が向上していった。

機会を捉えて無理なく交流を行うことで、発達障害をもっている児童への共感的理解が深まった。

②児童の発達にあった学習が保障できる

特別支援学級の児童であっても、算数や音楽など、教科を限定すれば通常の学級の児童と同じかそれ以上に力を発揮することができる児童がいる。そのような児童にとっては、通常学級の授業に参加することで個人のもっている能力を最大限に伸ばすことができる。

算数科や音楽科の実践を通して、特に技能の学習においては特別支援学級の児童が通常の学級の授業に参加することは可能であった。ただし、試行錯誤したり、考え方を学習したりする学習では困難があった。そのような場合は授業担当教員以外の大人が支援する必要があった。また、交流はすべての児童において有効というわけではなく、児童の特性や適時生を判断して行うことが重要であった。

２指導者の立場から

①指導法の共有ができる

特別支援学級の児童理解を通して,発達障害があったり､学習が苦手だったりする児　童への指導法を学ぶことができた。また、通常の学級の授業観察を通して、通常の学級における一斉指導について考えることができた。

②児童理解が深まる

特別支援学級と通常の学級の教師がお互いに担当する児童を見ることで、それぞれの学級の児童の課題を認識することができた。また、特別支援学級の教師が通常級の児童を見ることで、通常学級の児童の抱えている課題を抽出することができた。

以上のように、特別支援学級併設校において「児童の交流」及び「指導者間の交流」を行うことで、特別支援学級、通常の学級の児童双方において対人コミュニケーションスキルを学ぶ機会が増えたり、児童にあった学習保障ができたりすることが明らかとなった。また、教師にとっても指導の幅を広げる機会となった。

一方で、授業交流は児童の特性なども大きくかかわってくるため、児童が自分に合った授業を受ける機会を減らしてしまうことがないように、教師、保護者が児童理解をより一層深め、慎重に行う必要があると考えられた。